

本田初～中期の水管理

水稻の水管理は生育に大きな影響を与えます。田植え直後から生育中期（最高分げつ期ころまで）の管理によって、収量や品質が大きく変わってきますので、管理を上手に行い、多収で高品質な米の生産をめざしましょう。

1. 田植え後 ～浅水管理～

・田植え後は水深2～3cmの浅水として水温を高め、活着と生育の促進を図ります。低温の時は5～6cmの深水とし、保温に努めます。

速やかに活着し生育が促進されると分げつが増加し、穂数が多くなり、多収となります。

2. 除草剤の効果を高める ～止水管理～

・薬剤処理後7日間は落水せず、止水管理とします。水位が下がり田面が露出した時は、静かに入水し補充します。除草効果を確実にするために、中干しの開始までは湛水状態とします。

除草剤の有効成分は、水田土壌の表面に吸着されて処理層を作ります。特に処理後7日間が重要で、早期の落水は除草成分の流出や、処理層の形成を不十分にしてしまいます。処理層が壊れないように湛水状態を保ち、水田には入らないようにします。除草剤の効果を高めるポイントについては、「営農NEWS3028号（3月15日発行）」を参照してください。

3. 中干し

- ・田植え後40日ころから落水し、中干しを開始します※。期間は5～10日間とし、田面にひび割れができる程度行います。湿田や有機物が多い水田では強めに、水もちの悪い水田は軽く行います。
- ・中干しは、遅くても幼穂形成期（出穂前30日ころ）には終了します。
- ・中干しが終わったら、入水と自然落水を組み合わせた間断かんがいを行います。
※中干しは、分げつの数が必要な穂数と同じになったら（コシヒカリでは株あたり20～25本程度）始めることができます。生育が早い場合は、田植え後30日ころから中干しが可能です。

中干しの期間は、気象条件や土壌の違いによって変えます。長い場合は10日以上行うこともあります。梅雨時期にあたるので排水が容易に進まないことがあります。水尻（排水口）を低くしたり、暗渠の水甲を開けたりし、できるだけ落水するように努めます。

中干しの目的は、過剰分げつの抑制と、土中に空気を入れて根を健全にすることです。分げつが多すぎると穂数（もみ数）の増加により粒が小さくなったり、乳白粒などが多くなったりします。コシヒカリなどでは、稈（分げつ）が細くなり、倒伏しやすくなります。また中干しにより根の活力が維持されると養水分の吸収が十分行え、健全な生長により収量・品質が向上します。今年も夏季の高温により品質の低下が心配されますので、中干しをしっかり行うことが重要です。

さらに、中干しにより土が固まります。そのことにより、収穫前に早くから落水する必要がなくなり、もみの充実によって収量・品質の向上が期待できます。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。